

短編小説

「明暗明暗」

しんきゆうしん

(真っ暗)



冷たい雨がそぼ降る、ある冬の日の夕方、庭に面した縁側の沓脱石（くつぬぎいし）のそばに、どこから落ちてきたのか、まだ子供のすずめがびしょ濡れになって横たわっていました。

縁側の奥にあるお便所から出てきた小太郎君は、たまたまそれを見つけたのですが、見るとまだ少し羽が動いているようにも見えます。それが、風のせいなのか、自力なのかは分かりません。

しかし、小太郎君は「まだ、生きていたら」とばかり、咄嗟に裸足のままで冷え切った庭に飛び降り、そのすずめを拾い上げました。小太郎君は手のひらの中にかすかなぬくもりを感じました。

「まだ、生きている！」

それで慌てて縁側に面した八畳の間に駆け上がると、ひとまずアラジンの石油ストーブのそばにすずめを置きました。

その後、ドタドタと廊下を駆けて台所に行き、お母さんに事情を手短に説明してタオルを借りてくると、ずぶ濡れになっているすずめをなると驚かさないように、やんわりとくるんで水気をぬぐい取りました。

それから、和菓子が入っていた空箱を持ってきて別の乾いたタオルをその中に敷くと、両の手のひらで包むようにしてすずめをその上に置きました。

その夜、夕ご飯もそうそうに、小太郎君はすずめの傍にずっと付き添って、様子を見ていました。見ているとすずめは、時折動くものの、与えたご飯粒も食べないし、水も

飲みません。小太郎君は心配になったので、せめて水だけでも、と、考えた挙げ句に割り箸の先に脱脂綿を巻つけて、それに水分を含ませ、子すずめの口元に持って行ったりもしました。

しかし、子すずめにはその力もないようです。

それを見たお母さんが

「小太郎、それは末期の水と言って、ひとが死んだときにするものだよ。お母さんが時々様子を見て上がるから、今日はもう寝なさい」と言いました。

それでもしばらく、小太郎君はその場を離れずにいたのですが、さすがに眠くなったので、後ろ髪を引かれる思いを残しながら、自分の寝床につきました。

翌朝、小太郎君は目が覚めると、顔も洗うための洗面所には向かわず、真っ先に子すずめのところに飛んでいきました。

動いていないので「おい、おい」と言いながら人差し指で子すずめをつくと、子すずめは、ころん、と上を向きました。小さくて細い両の脚が胴体に引き込まれたように縮こまっています。よく見ると目にも薄皮がかぶって灰色っぽくなっています。

子すずめは、もう死んでいたのです。

雨上がりの朝日の中、学校に行く前に小太郎君は、庭先に園芸用のスコップで穴を掘って子すずめを埋めてあげました。子すずめの亡骸の上に、土を一盛り、二盛りして居るうちに、子すずめの姿はだんだん見えなくなってしまいました。

それから、見よう見まねで小さなお墓に向かって手を合わせたのですが、子すずめは霜の降りた土を被されてさぞかし冷たいだろうと思うと、可哀想で、可哀想で、涙がぼろぼろ出てきました。お父さん雀にも、お母さん雀にも、そして「僕」にも看取られないまま死んだ子すずめが哀れでなりませんでした。

その夜、小太郎君は夢を見ました。

夢の中で小太郎君はお墓に入った子すずめになっていました。夢の中でうっすら目を開けると、その上に土がどさつ、どさつ、と被せられ、次第に身体が重くなると同時に視界も効かなくなって、そのうちまっ暗になってしまいました。

まっ暗！何もなし！

小太郎君は恐怖の余り飛び起きました。額に汗をびっしょりかいていました。

その頃小太郎君は、おばあちゃんの部屋で、布団を二枚並べて寝ていました。怖くなつた小太郎君は、おばあちゃんの寝間着の袖口を掴みました。それに気づいたおばあちゃんが

「どうした？小太郎」と訊きました。

小太郎はおばあちゃんの寝間着の袖口を更に強くつかみながら訊き返しました。

「ねえ、死んだら何処に行くの？どうなるの？まっ暗なの？」

「さあね。おばあちゃんもまだ死んだことないから分らんよ。でも、生き物はみんな死ぬから、そのうち、みんなに分るよ。今からそんな心配せんで、子供は、はよう寝んさい」

小太郎君は、おばあちゃんの言葉には全然納得がいきませんでした。そうしてまるで観念でもしたかのように、

「そっか、やっぱり僕もいつか死んじやうんだ」

とこころの中でつぶやきました。

そうして、改めて潜った布団の中から、恐る恐る暗闇に包まれた部屋の中を見回すと、暗闇とは言え、闇の中にも濃淡があつて、その輪郭は何となく分りますし、窓の外の夜空との区別も分ります。

しかし、死んでしまつたら、その、闇の濃淡も、窓と空の区別もなくなってしまふのではないか？それこそまっ暗。

いや、まっ暗と感じている自分もないんだから、まっ暗以前のまっ暗。そういうのをなんで言うんだらう。

まず、小太郎君には今ある自分がなくなる、今見ている景色もなくなる、その目もなくなる、なくなるといふのもなくなるといふことがよく呑み込めませんでした。

小太郎君は、それ以上上手く考えられなくなり、だんだん想像がつかなくなつていききました。

そうしてそれを考えれば考えるほど、闇の奥へ、奥へと呑み込まれていき、次第にこの世に引き返してこれなくなるような恐怖を再び感じました。

頭が冴えて眠られなくなった小太郎君は、一晚、まんじりともせず朝を迎えました。

小太郎君は、徐々に朝の薄明かりが増してくる度に、閉ざされた真つ暗な水底から、少しずつほの明かりの指す水面に向かって浮き上がってくるような感触を得ました。しかし、ほの明かりと共に、少しずつ「この世」に戻ってくるのを感じてホツとしながらも、直ぐその後で、何かを追つかけてくるかのように、

「朝がくる。今は毎日、朝がくる。でも死んじやつたら、この朝は来ないんだ。ズーっと、ズーっとまっ暗なまんまなんだ」

と言う思いに囚われました。

「僕もいつかは死んじやう。でも、死んだらどこへ行くんだらう？死んだらどうなるんだらう？死ぬってどういうことなんだらう」という疑問と恐怖だけだったのです。

小太郎君は、それまでの、生まれてから10年の間に、このように言いようのない不安を覚えたことは未だかつてありませんでした。

それは、お父さんやお母さんに叱られて罰に入れられた時の押し入れの「暗さ」とも違いましたし、授業中、教室内で騒いで、みんなが体育の授業に校庭に出た後も、独り残りで廊下に立たされた時の「ひとりぼっちな感じ」とも違いました。

小太郎君は、それ以降というもの、何をやっても、そうしてそれが上手くいったときほど「でも、どうせいつかは・・・」という説明の付かない不安が必ず、尾を引くかのように残るようになったのです。

小太郎君は今までのように、たとえ上手くいったとしても、完全に最後まで無邪気に喜び切ることがなんとなく出来なくなってしまうました。

その後、小太郎君の耳元にはこの「でも、どうせいつかは・・・」と言うこびとのささやきのような声が、いつの間にか住みついてしまい、時に応じて、大きくなったり小さくなったりはするものの、完全にそのささやきを止めてくれることはなくなったのです。

(曲がり角)



小太郎君はチャンバラごっこが大好きでした。しかし、友達はテレビの映画「コンバット」の影響で、トミーガンやシムマイザーガンを使った戦争ごっこが大好きでした。

しかし、小太郎君はみんなと遊んだ後、家に帰ってきてから弟の小次郎君とチャンバラごっこをして遊び直しました。小太郎君は同じくテレビ映画「白馬の剣士」の影響でチャンバラごっこの方がずっと好きだったからです。

なぜ「コンバット」ではなくて「白馬の剣士」だったかというと、ひとつには、みんながお年玉や何かでちゃんとした機関銃のおもちゃを買ってもらって持っているのに、小太郎君はお年玉をもらったことがないので、仕方なく家にあった木材の端切れや釘を使って自分で機関銃をこしらえたのですが、とても恰好が悪く、みんなに気後れしてあまり楽しくなかったからです。

もう一つの理由は、こちらの方が強かったのですが、豊臣家の残党の若武者がたった二人で、江戸幕府を開いたばかりの徳川家康の家来やその軍門に降った諸藩の家臣群を数多（あまた）相手に、幾多の難関、危機を乗り越えて、それでも「につきき裏切り者」の家康の首を狙いに行くというのがとても格好良く思えたからでした。

それで、友達との遊びから返ってくると、早速小次郎君と庭でチャンバラをはじめ、テレビの画面に做って（ならって）名乗りを上げたり、刀を合わせて小競り合ったり、切ったり切られたりして「えいっ」とか「やられたー」とか夕暮れまで遊んでいました。

時には、それが高じて、家族で高尾山に遊びに行ったときに買ってもらった木刀にひもを巻き付け、それを背中に背負い、そのせいで背負えなくなったランドセルを手を持って登校して「一体おまえは何を考えているんだ。学校にそんな物騒なものをもってくるんじゃない！」と先生に大目玉を食らったこともありました。

あと、小太郎君は野原歩きや里山登り、田んぼのあぜ道歩きが大好きでした。小太郎君はそのあちこちを歩いて、友達と蛙や虫やザリガニを見たり捕まえたりして遊んでいたのです。そんなわけで、学科の中では理科だけが大好きでした。成績は良くないのですが、授業はとても楽しかったのです。

授業と言えば、小太郎君は、普通の学科があまり好きではありませんでした。とにかく机に向かって、教科書と黒板ばかりを見ているのが苦痛だったのです。その点、野山歩きや理科の課外授業は、空の下の広いところに出られて、自由にあちこち駆け回ることが出来るので楽しかったのです。

それと、宿題も好きでした。宿題と言っても、学科の宿題ではなくて、産休で代わりにやってきた臨時教員のおばちゃん先生が始めた「自由帳」の宿題が好きだったのです。

これは、その日のうちに気づいたこと、感じたこと、疑問に思っただけなことなど、何でも好いから書いて持って行くと言う宿題でした。それを先生が見て、一重丸から花丸を赤ペンでつけ、いいものや面白いもの、みんなが知っていると得になるものは、先生が読んで聞かせるというものでした。

小太郎君はこれに夢中になりました。

野山の小動物の観察に始まって、深夜の月の満ち欠けの観察や、とても関心の高かった恐竜の研究など、手当たり次第に自由帳に書いていったのです。

「今日は5ページ書いた」「今日はもっと書いた」と熱中し、学校の勉強などそっこのけでしたので、成績はむしろ悪くなっていきもしたのです。

しかし、当人はそんなことにはいっこうにお構いなしで、学科の授業を除いては、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。

ところがある日、小太郎君はお父さんに呼ばれました。小学校が冬休みに入った最初の日曜日の夜でした。

お父さんはクリスマスの日に小太郎君がもらってきた成績表を前にして言いました。「おまえも、来年は六年生になる。だのに、遊んでばかりいてちっとも勉強に身が入っていない。このままでは良い上の学校に行けない。とにかく今の小学校は田舎でのんきすぎる。刺激がない。だから、冬休みが明けたら、転校しなさい。隣の学区にある、みんな勉強する小学校にだ。越境入学の手続きは済んでいるから。分かったな」

小太郎君は一瞬、ポツカンとしてしまいました。そうしてしばらく経ってから、高いクレーンからつり下げられた家壊し用の大きな鉄球が引くだけ引いたあとで放され、思いっきりたまった加速度を伴ってドツカーンと頭に打ち付けられたような衝撃を感じました。

頭の中が混乱しました。

「なに？なに？なに、それ？」

自由帳がなくなる。友達もいなくなる。野山歩きも出来ない。第一友達にお別れの挨拶もしていないで、突然消える？

そうしてしばらく考えてから、ここに住んでいるのに、他の学校に通う？それってどういうこと？みんなに会ったら、なんて説明するの？変なヤツだと思われるよな。隠し事するうそつきなヤツだって。みんなを捨てたヤツだって。粗末にしたヤツだって。これってはっきり言って裏切り者って言うこと？

しかし、頭が良くて身体の大きなお父さんには何も言えませんでした。

出口を見失った小太郎君は、一瞬にして真っ暗闇に放り込まれたような気がしました。楽しみにしていた、大晦日やお正月の行事もいっぺんに吹っ飛んでしまいました。

お父さんはすでにお風呂に入りに行っていないなくなっていました。

「ぼくはって言うことは、小次郎も、って言うことか」

ということは、ふたりでチャンバラも出来なくなるのかとも思いました。

小太郎君は、大きな曲がり角にさしかかったような気がして、曲がり角の向こうに何が待っているのか、想像が付かず、ただただ大きな不安を覚えたのでした。

(ズドン)



転校して、教壇の脇にたって挨拶をしてすぐ、小太郎君は言いようのない恐怖に襲われました。

教壇脇から教室を見回して、新しい友達顔つきを見るやいなや、まるでそれが今までの友達と違っていることが一目で分かったからです。

変な言い方ですが、みんなの前に立っている自分の姿が、今までテレビで見ていた「白馬の剣士」に出てくるお百姓さんの小せがれで、つんつるてんの半纏（はんてん）に草履を突っかけて青洩（あおばな）を垂らしているように思え、それが、半ズボンで皮靴を履いた西洋の子供の前に立たされ、ためつ、すがめつ値踏みされているような感じがして、恐れおののいてしまったのです。

それが曲がり角の向こうの最初の景色でした。

多少想像はしていたのですが、実際にそうなってみると、想像を遙かに超えて「辛い」ものを小太郎君は感じたのです。

「どえらいところに来てしまったぞ」

そんな折、転校して一週間が経ったある日のホームルームの時間のことでした。先生が教壇の上から

「先週のこの時間に先生は芥川龍之介の「蜘蛛の糸」というお話をしましたね。極悪人のカンダタでしたが、一回だけ蜘蛛を助けたのをお釈迦様が覚えておいでになって、蜘蛛の糸を地獄に垂らして、救おうとなさったのですが、自分の下から地獄の亡者どもが上がつてくるのを見て、糸が切れたらまた地獄に墜ちると怖れたカンダタが、自分の下の糸を切ったのをお釈迦様をご覧になって、カンダタの上の糸を切っておしまいになったと言うような話でした。

ところでみなさんは、このお釈迦様のなさったことをどう思いますか？当然だと思う人、それはひどいと思う人、それぞれに手を上げてくださいね、じゃあ、まず」

小太郎君はたまげてしまいました。

実は小太郎君は前の小学校の同じホームルームの時間に「蜘蛛の糸」の話を聞かされて知っていました。しかし、その時の先生の質問は、カンダタのことをどう思いますか？と言う質問で、その答えは直ぐに思いついたのです。しかし、蜘蛛の糸を切ったのがカンダタではなくてお釈迦様で、それをどう思うかの話など考えたこともありませんでした。

周りを見ると、新しい同級生達が、何のためらいもなく意図も平然とそれぞれの意見に手を上げています。しかも、元気よく。

「レベルが違う。ついて行けない」

そんなわけで、小太郎君は先生の一回目の質問にはテストらあげることが出来ませんでした。

先生は、

「それじゃ、しばらく考えて、もう一度後で挙手を取りますから」と言っ、しばらく間を置きました。

そうして、幾分時間が経った後、また同じ質問をしました。

小太郎君は、どちらに手を上げて良いのかさっぱり分からなかったので、目立たないようにおそるおそる両方に手を上げました。

先生は

「それでは、来週は何故そちらに手を挙げたか、皆さんの意見を訊いてみたいと思います。よく考えてきてくださいね。では、今日はこれでおしまいにします」

なんか小太郎君は「生きた心地」がしませんでした。それでホームルームが終わるとぐったりしてしまったのです。

しかし、その日はそれだけでは済みませんでした。

小太郎君は、ぐったりした心に少しでもきれいな空気を入れようと、息を吸いに校庭に出ようとして立ち上がりかけたその時、ひとりの男の子がやってきて言いました。

「君！」と言ったのです。

おまえではなく、名前でもない呼び方をはじめて耳にしたので、ちょっと驚きました。そうしてその後で

「はつきり手を挙げなよ。どっちか、はつきり。どっちつかずじゃ情けないと僕は思う」と言いきると、すたすたと自分の席に戻っていったのです。当然周りに居た人たちにもその話は聞こえていたはずですよ。

その少年は、いつも見ている漫画の「おそ松くん」の登場人物の一人になぞらえて級友がつけた「ちび太」というあだ名のこのクラスの学級委員長でした。普段はふざけてばかりいるのですが、アタマが抜群に良くて、自分の意見もはっきり持っている子でした。

小太郎君は、ちび太君が自席に戻った後、恥ずかしさと情けなさで激しく動揺しました。同時に動揺しているのを必死に隠して平静を装いました。

「進学校の級長さんは全然違うんだな。そんなところまで見てるなんて」

おそらくちび太君は転校間もない新人がどんなヤツなのか、ある程度注意を払っていたから、そういうことに目が行ったのかもしれない。

しかし、小太郎君にはそんなことを考える余裕は全くありませんでした。

「お主、見たな。生かしてはおけぬ」

普段は、のほほんとしている小太郎君でしたが、その時ばかりは、まるで悪人が抱くような気持ちになったのです。

それは、今まで味わったことのない初めての感情でした。小太郎君は、その感情の芽生えに少したじろぎ、それを過ぎると、自分がなんか、だんだんイヤなヤツになっていくような気がして、悲しくもなりました。

たった一週間しか経っていないのに、小太郎君は自分が、とてつもなく遠い世界に来てしまったような気がしました。

「なんか違う。なんかおかしい。なんか僕じゃない」

小太郎君は、ぼんやりとですが、説明しようのない違和感を覚えました。しかし「違和感」などという言葉知らない小太郎君は、居心地が悪い位にしか捉えることが出来なかったのです。

小太郎君は、その居心地の悪さよりも「みるみる減っていく自信」のスピードの速さにいささか慌てふためいていて、それどころではなかったのです。

正直言って、小太郎君は、早く家に帰ってこたつに潜って眠ってしまいたいような気分でした。

しかし、そんなときに限って頭が良くて、大きな身体のお父さんが、あの日お風呂から上がってきて、小太郎君に言った言葉を思い出したのです。

「おまえは井の中の蛙大海を知らずだ。井戸の中の蛙はそれがすべての世界だとのぼせ上がっているが、それは外の大きな海を知らないだけの話だという意味だ。大きな海に行つて荒波にもまれてこい。そこで何があっても逃げるんじゃないぞ！戦争では、敵の前から

逃げ出したら、後ろから味方にズドンと撃たれるんだ。いいか、逃げ出すんじゃないぞ。卑怯者になるな。分かったな」

小太郎君はそれを思い出して、必死にこらえました。「ズドン」という音の響きと「卑怯者」という言葉が、耳元で何回も鳴っていました。

後年、年老いた小太郎君は、このときのことを思い出して、苦手を逃げずに乗り越えると言うことと、その乗り越えた道が、自分に合っている道かどうかと言うことは全然違うことなのに、それを一緒にしてしまったのがいけなかったな。あの「ズドン」は効き過ぎた、と思ったそうです。

時に小太郎11歳。成人の日の祝日、前日のことでした。

(うそ)



小太郎君のお父さんの名前は太郎と言います。

小太郎君は太郎の小せがれだから、小太郎、弟の小次郎君は2番目の小せがれだから小次郎と名付けられました。

小太郎君と小次郎君は以前の学校で先生やみんなに、その名を呼ばれるたびに少しイヤな気になり、兄弟でそのことを話し合ったこともありました。

「なんか、いい加減だよな。1番目に出来たから第一小学校、2番目だから第二小学校みたいで。ナンバーズスクールは仕方ないけど、ナンバー子供はちょっとなあ」

結構しっかり者の小次郎君は、どこで聞き込んできたのか、ナンバーズスクールという英語を使って不満を述べたりもしました。それを聞いて小太郎君はちょっと驚いたりもしました。

それと、小太郎君は、名前に「小」の字が付いているのもイヤでした。大きなお父さんに対してなんとなく「小者」と見られているような気もするし、なんとなくお父さんの「小物」で持ち物みたいな気がしたからです。

小太郎君は、それを思うと幾分悔しい気がして、心の中でお父さんに「負けたくない」と思うことがしばしばありましたが、弟の小次郎君は、鼻から「どうせかないっこない」と競いあいを諦めているらしく、この件にかんしては全くの脳天気で、対岸の火事とばかりに馬耳東風を決め込んでいました。

同じ子供でも長男と次男ではかなり違います。それは恐らくお父さんの扱いにもよるのかもしれませんが。とにかくことあるごとにお父さんは小太郎君に「長男だから」「跡取りだから」を連発していたのです。「飲み会の鍋の締めはうどん」の代わりに、お話の締めは「長男だから」みたいな感じで、まるでそれがないと宴が閉まらないかのようでした。

小次郎君は「あ、また言ったらあ」で済みましたが、小太郎君は毎回、テレビ映画のミッシェン・インポッシブルで「おはよう、フェルプス君、ところで今日の」から始まる極秘任務を与えられたかのように、緊張するのを感じました。テレビ映画は面白かったのですが、それが自分の身に起こるとなると良い気持ちはしませんでした。

ある日、朝から寒気がして仕方がなかったのですが、小太郎君は少し無理をして登校しました。

しかし、お昼の給食前になって、頭がぼーっとして、寒気も留まらないので、先生に許しをもらって保健室に行くと、はかった体温計が38度5分のあたりを指していました。

「小太郎君、すごい熱よ。用務員さんに言って、自転車で送ってもらえるようお願いするから、直ぐに帰りなさい」

保健室の先生は、小太郎君の身を心配してそう言いました。

小太郎君は、それを聞いて、はたと困ってしまいました。

「大丈夫です。独りで帰れます！」

「何言っているの。途中で遭難したらどうするのよ。遠慮はいらぬから送ってもらいなさいね」

実は、小太郎君は、保険の先生の申し出を聞いたときに、すぐさま「ヤバイ！」と思ったのです。

と言うのも、学校に住んでいる住所として届けてある家は、越境入学で所番地をかりているだけで、実際には住んでいなかったからです。それに、その場所がどこなのかうろ覚えでしかないこともありました。

「ばれる！ ばれたらヤバイ！」

しかし、そんな説明は口が裂けても言えませんから、小太郎君はいわれるがままにせざるをえませんでした。

これは後々分かった話ですが、この小学校には、そうした子達が結構いて、学校側にとってもそれは「暗黙の了解事項」だったので、その頃の小太郎君は、そんなことを知るよしもありませんでした。

一見野放図に見えて、根が真面目な小太郎君は、越境先ではなくて、本当の住まいに帰ったのでは、せつかく「一味で口裏合わせをした」のに間拔けな自分がドジを踏んで越境

の嘘がばれてしまい、そのせいで「捜査陣の矛先」が親に向けられるはめになったら迷惑がかかると思って、自分が寝起きしている住まいではなく、うろ覚えの越境先の住所へと案内したのです。

小太郎君はテレビの刑事物が大好きでしたから、頭の中にそんな喩えの言葉が浮かんできたのですが、そんな喩えをして遊んでいる場合ではありませんでした。

早く本当の家に帰りたいのは山々なのですが、まずは越境先の家に案内しないことにはその先に進めません。しかも当然うろ覚えですから、あっちへ案内したりこっちへ誘導したりになります。

「え、君、自分ちもよくわかんないの？なんか隠してない？」

そんなことを、自転車をこいでいる用務員さんが、突如振り向いて、刑事みたいな疑いの目を向けながら言うのではないかと、小太郎君はひやひやして落ち着きませんでした。

それでもやっとその住所の家にたどり着きました。

小太郎君は用務員さんへ送ってもらったお礼を言いましたが、その家の中に勝手に入るわけにはいかなないので、仕方なく「もう大丈夫ですから」と早々に用務員さんが学校に戻るように促し、その用務員さんが角を曲がって見えなくなったのを確かめてから、やおら自分の本当の家に向かって歩き出しました。

それにしても本当の家までの道のりはかなり長いものでした。小太郎君は悪寒と関節痛とどるさでふらふらになりながら遠い道のりを家まで歩いて帰りました。その家は小太郎君の家とは正反対の方角だったので、辛い身体なのに、いつもの二倍の距離を歩かなくてはならなかったのです。

小太郎君は、つめたい風にさらされて歩きながら

「一体僕は何をしているんだろう？なんでこんなことしてるんだろう？なんでこんなことをするようなことになっちゃったんだろう？」

と、しばらく前から自分の身に起き始めている「今までとは全然違う」出来事の数々が飲み込めなくて、何度も何度も自分に問いかけました。

ですが、小太郎君は家に戻ってもなぜか越境先の家に行ったこととその疑問のことは親には言いませんでした。ただ風邪をひいて熱が出たから早退してきたとだけ言いました。

前の小学校の友達を裏切り、保健室の先生に嘘をつき、用務員さんにも嘘をついてしまった。なんか自分がだんだん「いやな人間」になっていっている気がしました。そんな風になっっている自分のことを親が知ったらさぞかし自分のことを嫌うだろうと怖れて言えなかったのかもしれない。

発熱による身体の辛さより、遙かにそのことの方が小太郎君にはこたえました。

「え？それ本当？うそじゃないの？」

あのこびとの囁きが、この前とは違った言葉になって、何かをするたびに耳元でするようになりました。

ちびた君のグサリ、お父さんのズドン、そうして今日のうち。

それやこれやが積み重なっていたようです。次第に小太郎君は、自信はおろか、自分のことが少しづつ嫌いになり始めていました。そうして、この日以来、丸顔童顔の小太郎君の顔から、屈託のない明るい笑顔が次第に消えていったのでした。

(どんでん返し)



小太郎君には、大人になったらなりたいたいものがありました。

それは、考古学者でした。

大空の下での野山歩きが好きで、土を掘りくり返すのも好き。調べ物が好きで、推理を重ねて真相にたどり着く判じ物としての刑事ドラマも好き。調べ物が好きで、推理を重ねて真相にたどり着く判じ物としての刑事ドラマも好き。

他にも、旅行家だとか南米の移民だとかシルクロードの探検家も、なりたものの候補に挙がっていたのですが、それらはあまりにも大まかすぎてとらえどころがないような気がして、間違いなく土を掘った経験から想像することが出来る考古学者に的を絞ったのです。

もう一つの理由は、他の夢がただただ歩き回ったり、動き回ったりするのに対して、考古学者は観察したり、想像したり、こうではないかと仮の答えを出したりする、えも言われぬ楽しいオマケがくっついていたのでした。

前の学校での自由帳は、知らず知らずのうちに、その夢を更に具体的なものにするのにも役立つていました。それで小太郎君は自由帳の宿題が大好きだったのかもしれない。

ところが図らずも越境入学する羽目になって以来、その夢がいつの間にか見えなくなっていました。いや、そんな夢を持っていたことすら忘れてしまっていたのです。それほど、新しい学校での生活は、それまでの生活から激変していたのです。

夢に代わって現れたのが、どっちつかず、だの、卑怯者だの、うそつきだのの「ありがたい名前たち」でした。

気分転換に野山歩きをしたくても、新しい学校は街の真ん中であって、野山がなく、ならば家の近くで、と思うと、家の周りの野山で「捨ててきた友達」とあって「裏切り者」と言われるのが恐くて、それも出来ませんでした。

なんだか、小太郎君は自分がテレビの中で見た、とうまる駕籠で市中を引き回される罪人が表通りを、大手を振って歩けない日陰者にでもなったような気がしました。

「なんでこんなことになったんだ。なんでこんなイヤな思いをしなくちゃならないんだ」小太郎君はだんだん腹が立ってきました。その時、お父さんの顔が浮かびました。

「お父さんが悪いんだ。転校なんかさせて」

しかし、その直ぐ後には

「逃げたらズドンだぞ。いいか、卑怯者になるな」

と言う言葉が、その怒りを骨抜きにするかのようによみがえってきました。

小太郎君は、苦しくなりました。

考古学者にはなりたいたいけれど、卑怯者にはなりたくない。でも、卑怯者にならないために、考古学者を諦めるのもイヤだ。

小太郎君の頭の中では、お互い相反する考えがぐるぐる回って、どうしたら良いのか分からなくなってきました。

そんなとき、突然あのこびとの囁きが聞こえてきました。

「いずれはみんな死ぬんだ。おまえもだ」

小太郎君は、ぞっとして脂汗が流れてくるのを感じました。

いずれ死ぬのに、したいこともしないで、大通りから外れて、こんなへんな脇道に逸れていて良いのか？

「イヤだ。こんな思いのまま死ぬのはイヤだ！」

言葉にすれば、そんな文言でしたが、実際には小太郎君はそんなキチンとした言葉を思いついたのではなく、ただ闇雲に、何かに対して突っかかっていきたい気持ちと同時に、それをしないでいる自分自身に対してとてつもなく腹が立っていたのです。

その夜、転校して既に2ヶ月が経ち、六年生への進級が間近になっているというのに、いっこうに勉強がはかどっていない小太郎君に業を煮やしたお父さんが、小太郎君を自室に呼んでこう言いました。

「四月から六年生になる。その一年後には中学生だ。公立ながらこの辺の秀才が集まる学校で、勉強も大変になる。このまま行ったら、おまえはその中で、間違ひなく沈没してしまふ。そうならないために、来週から塾に行け。隣の進学塾だ。分かったな」

いつものことなら、頭が良くて身体も大きいお父さんが言うことに間違ひがあるなどと疑ったことがない小太郎君でしたが、昼間のこびとの囁きのせいか、この日の小太郎君は少し違っていました。

「イヤだ！行きたくない！」

小太郎君は思いきって言いました。

言ったあと、興奮と恐怖で、握りしめた拳がガタガタ震えました。

「なんと言った？今、お父さんになんと言ったんだ！！」

小太郎君は、心臓がのどの奥から飛び出しそうになりました。しかし、それでもまるで何かに憑かれたかのように、そう、こびとの囁きを振るい払うかのようにして

「イヤだ！イヤだ！絶対に行かない！学校が終わった後で、またその上に別のところで黑板と教科書を黙って座って見ているなんて、もうイヤだ、そんなの！」
と、泣き叫びました。

いつも冷静で、微動だにしないお父さんが、珍しくその勢いに押されて、少したじろぎました。

脇でお母さんが

「小太郎、お父さんになんていうことを言うの！謝りなさい！」

と、ややきつく、言いました。お母さんはいつも大抵お父さんの味方をしてきたからです。

お父さんは、しばらく黙っていました。少し、息を抜くと

「小太郎、お父さんはおまえの将来の事を思っている。おまえにはまだ分からんだろうが、世の中というのは大変なところだ。そこを生き抜いていくためには武器がいる。良い学校に行くのは、その優秀な武器を手に入れるためだ。それを理解しろ」

そう言われると、それこそ小太郎君にはそれに反論するだけの「優秀な武器」に見合う理屈の持ち合わせがありませんでした。

小太郎君は、その武器を持ち合わせていないくやしきで自分の胸をかきむしりたいような思いでいっぱいでしたが、もうそれ以上は何も言えなくなってしまうました。

ところがお父さんは、何を思ったのか突然

「おまえは将来一体何になりたいんだ？なりたいたいものがあるのか？」

と訊きました。

小太郎君は、一瞬ためらいましたが、どうせここまで言ったんだから、後は野となれ山となれ、馬鹿にされたっていいさ、と思ひながら

「考古学者になりたいです」

と、ぼつりと静かに言いました。

当然突っ込まれると思っていたのですが、案に違いお父さんは、小太郎君を馬鹿にするようなことは言いませんでした。そうしてしばらく黙って考えるそぶりを見せてから

「進学塾は行かなくていい。その代わり英会話塾に行け。英語を勉強しろ。それなら良いか？」と全く思いがけないことを言いました。

「英会話？」

小太郎君にはお父さんが考えていることが全く分かりませんでした。しかし、小太郎君は、今まで考えもしなかった「英会話」というものに、何故か少しだけ興味をひかれたのです。

小太郎君は当然「歩み寄り」などと言う言葉をまだ知りませんでしたが、お父さんが譲ったぶん、自分も少し譲らないと行けないかなと思ひ、

「はい」

と素直にこたえました。

脇でお母さんが少しホッとした様子を見せました。そのお母さんにお父さんは

「腹が減った。小太郎もだろう。飯の用意をしてくれ。あと、明日、本屋に行って英語の辞書を買ってきてやれ。辞書名と出版社名は後で俺がおまえに書いて渡すから」

と言いました。そうして

「小太郎、これからは世界が相手だ。貿易にしろ、学問にしろ、だ。英語はそのためには非必要な武器だ。考古学者が英語を喋れんで、どうする。発掘先が日本だけとは限らんだろう？むしろ世界の大陸が舞台だ」

と言いました。

小太郎君は、今度は力強く

「はい！」

と大きな声で返事をしました。

小太郎君は、昼間とは打って変わってこころが少しわくわくするのを感じました。そうして、自分のおもっていることは、恐くてもちゃんと行った方が良いのだなとも思いました。

そのあと、小太郎君はテレビで時代物を見ました。薩摩藩士、中村半次郎を主人公にしたものでした。

その中で、主人公が、引用なのか自分の言葉なのかはわかりませんが、

「我が胸の、燃ゆる思いに比ぶれば、煙は薄し桜島山」と言ったのが、語呂が良いせいもあってか、妙に耳に残りました。

英会話、世界の大陸、燃ゆる思い。

いつも間にか、どっちつかず、卑怯者、うそつきと言う言葉が、小太郎君の頭の中で「オセロゲームの最後の一手」が効いたどんでん返しのように、その三つの言葉に置き換わっていました。

小太郎君は、早く明日になって、お母さんが英語の辞書を買って来てくれないかなと思
いました。

そして五十八年後（小太郎のブログより）

2021/11/9-2

「奇妙な朝」



墓地公園を抜けて帰宅する折に、石畳を打ち付けるほど盛んに降る雨の中で、豪勢な水量の噴水が立ち上っております。

「こんなに激しい雨が降って周りに水量は溢れているのに、なんで洪水の川に放水する様な噴水を止めないんだろう？」

その先を進んで、水抜きされた池の周りにぐるり巡らされた遊歩道を歩いていると、まだ子供で羽毛がぬけかわっていないのでしょうか、体全体が淡い灰色をした鷺（さぎ）が一羽、すくつ、とした姿で立っております。

仲間はいないし、白い羽毛の親鳥もいません。

足下の泥中の餌を捕るでもなく、歩くでもなく、ただ立っている。

「何が目的で身動き一つせず、この激しい雨の中で独り、只々ひたすら立っているの？」

その先をさらに進んで、墓地公園を抜け、畑に出ると今度は、いつもはそんなことをして居ない多くの鳩たちが畑の中にあるのでしょいか、餌になる何かを盛んにつついています。

「よりによって前方が霞む位のこの激しい雨のこんな日に、なんで？」
何かよくわからないことだらけの奇妙な朝でした。

今朝は物と人間以外の生き物たちでしたが、

「自分も端（はた）から見ると、こんな風に奇妙に映って居るのかもしれないぞ」
ふとそんな疑念がわきました。

やっている本人はそれなりの意図があつて大真面目。しかしそこだけを周りから見ると意味不明な謎の行動。

いや謎の行動どころか「無駄かむしろ逆効果」な振る舞い。馬鹿げているようにしか見えない。

「自分の想いと人の評価というものは、いつもこんなものかもしれないぞ」

ヤギさんが相手に喜んでもらえたと信じて疑わずに差し出している最高の餌である紙が、狩りを仕立ての新鮮な生肉が食べたいライオンさんには意味不明の申し出にしか映っていないような行き違いばかりなのかもしれない。

そう思うと、

ボタンの掛け違いが怖いような、独り合点による勘違いが恥ずかしいような、そのはき違いを犯さずにいられるのは、針の穴を射通す程難しい業である事が途方もないような。

お互いに異なる姿の相手を思い浮かべながら求める人を必死に探しているような様な位相の違いの隔たり。

この先、もし位相が合ったとしても、その上で道が交わる地点に迄たどり着けるのかどうかさえわからない、

雨が霧状に飛び散る今朝の豪雨をさらに一段と濃くしたような視界不良。

その絵姿を眼前に想像すると、

どちらが沖合方向で、どちらが辿り着きたい、自分が目指す陸地方向なのが見えない、一つ間違うと取り返しのつかない事になりかねない焦りと困惑からでしょうか、

何か言い知れぬ不安とそれを解消できなかった場合に生起するであろう事態への胸騒ぎに徐々に覆われていくのを止めることができませんでした。

(尚、当短編集は著者の二千七年度長作作品を加筆修正したもので、当時採用した写真の著作権が不明です。そのため長作県が判然としおりません。少なくとも著者には使用権はございませんのでご承知おきくださいませ。怠慢とは存じますがお許しくくださいませ)

(著者プロフィール)

うときゅういっき

本名宇都宮一貴(うつのみやかずたか)

一九五三年東京生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科を二回留年の後、卒業。大手電機メーカー商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。四十歳から五十二歳まで十二年間重度うつ病を罹患。左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊の後、生還。定年退職後、嘱託社員契約を辞して株式会社うとQを設立。趣味は観察すること、考えること、書くこと、カメラの四つのk。著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名に由来する。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき となります。漢字にするとかなり御大層な名前に見えますので、敢えて音読みひらがな表記しております。

ホームページ：<http://utokyu.co.jp>

(出版情報)

著 者 うときゅういっき

発行人 宇都宮一貴

発行所・株式会社うとQ

〒二一五・〇〇一八

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東5丁目34番7号

電話：〇四四・九八九・一六九八

発 売 株式会社うとQ

編 輯 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

カバーデザイン&DTP 製作 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020

発行日：二〇二一年十二月三十一日 初版発行

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複製、複製することは禁じられています。

(その他著書)

● 「人生終わったなと思った時に読む本」(二〇一五年刊ソフトカバー在庫僅少)

● 「人生終わったな」と思う間もなくトンネルの闇を抜けて広野原(二〇二〇年刊)

amazon kindle)

- 「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二〇年春月の巻〜十二月の巻」(二〇二〇年刊 amazon kindle)
- 「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「二年目のニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二一年一月の巻〜十月 最終巻」(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 「コロナ禍 初年度カリ屋ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」(二〇二一年刊 amazon kindle)
- (初本) カリ屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」(二〇二〇年刊 amazon kindle)
- (改訂本) カリ屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」(二〇二〇年刊 amazon kindle)
- 「コロナ渦カリ屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「子、親を選べず」三部作(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 「コロナ渦カリ屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集(合本) 「子、親を選べず」新四部作(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 「コロナ渦 カリ屋ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二一年上半期(合本)(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 「コロナ渦 カリ屋ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二一年度(合本)(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 「ネパールカリ屋「ナマステ」別館堂&英語教室「すすき野留学」主人 辞書を置かない考える英語教室「前座の英語」Pre & Prep. English 第1集〜第6集(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 「ネパールカリ屋「ナマステ」別館堂&英語教室「すすき野留学」主人 辞書を置かない考える英語教室「前座の英語」Pre & Prep. English 2021(合本)(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 線路は続くよ、何処までも 野を越え山越え谷越えてその一、その二(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 線路は続くよ、何処までも 野を越え山越え谷越えてその一、その二(二〇二一年刊 amazon kindle)
- 線路は続くよ、何処までも 野を越え山越え谷越えて 合本(二〇二一年刊 amazon kindle)